

# 2025年度 学校評価（自己評価・関係者評価）

学校法人帝京大学  
帝京大学幼稚園

## 1・本園の教育目標

自然に囲まれ恵まれた環境の中で、豊かな情操を養い充実した集団生活の中で先生やお友達とのかかわり合いを通して、まず一人立ちできる子供という事を基本に「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五領域に基づき、“元気で丈夫な子”“素直で優しい子”“人に迷惑をかけない子”を育てることを目標とする。

## 2・本年度重点課題

### 1・教育課程・指導

幼児が意欲的かつ主体的に遊び（活動）を進めるための環境の構成を行い、継続的な探究活動を行う。

自分の思いを表現し、伝わる喜びを感じられるような保育を行う。

### 2・保健管理

健康に関する幼児の意識を高める指導の工夫を行う。

子ども達にとって分かりやすい指導を年齢に合わせて行う。

### 3・研修

園内外での保育環境向上の為の研修に参加。研修で得た学びの共有

## 3・評価項目の達成及び取り組む目標・計画

	評価目標	評価	取り組み状況・結果
1	幼児が意欲的かつ主体的に遊び（活動）を進めるための環境の構成を行い、継続的な探究活動を行う。自分の思いを表現し、伝わる喜びを感じられるような保育を行う。（全体）  （探究活動・すくわくプログラム）	A	<ul style="list-style-type: none"><li>・子どもの主体性を尊重し、探究が継続する環境設定をし、子どもの興味・気付きから活動を広げる保育ができている。子どもの声を拾い、発表や共有の場をつくることで「伝わる喜び」を育み、その日の活動が翌日へつながるように工夫出来た。</li><li>・玩具や素材の配置をわかりやすくし、自分で選べる環境を整えたり、興味が広がるような素材・自然物・製作物をさりげなく置く工夫をし、自分で選び、遊び込める環境構成ができた。</li><li>・子どもの気持ちに共感し、声のトーンや関わり方を調整し子どもの気持ちに寄り添い、表現を支える関わりができた。保育者自身が楽しむ姿を見せ、気持ちを共有する関係づくりに努める事が出来た。</li><li>・言葉で伝える力を育てるための丁寧な関わり子どもが安心して思いを表現できるよう努めた。</li><li>・子どもの興味・気付きから学びを広げる探究活動の充実として、子どもの「気付き」「疑問」「興味」から活動を発展させることが出来た。</li><li>・凶鑑や顕微鏡などを使い、子ども自身が調べたり考えたりする姿が増え、主体的な探究心が育っているという実感が共有されている。</li><li>・砂・植物・生き物・音など、身近な自然・素材をテーマにした活動に</li></ul>

			<p>於いて、子どもが感触・変化・音の違いなどを楽しみながら学ぶことが出来た。低年齢児でも自然物を通して探究できるよう工夫し、「知る喜び」を共有できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>音やリズムをテーマにしたクラスでは、手作り楽器や劇への発展など、表現活動との結びつきも見られた。</li> <li>今後に向けた課題：振り返りの共有・活動の継続性・環境づくり職員間での共有や振り返りが課題として挙がっている。活動回数を増やしたいと感じるケースもあり、継続的な探究活動のための環境整備が必要とされている。</li> <li>園外の自然環境も活用し、学びの場をさらに広げたい。</li> </ul>
2	<p><b>保健管理</b> 健康に関する幼児の意識を高める指導の工夫を行う。子ども達にとって分かりやすい指導を年齢に合わせて行う。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な健康習慣（手洗い・うがい・水分補給・生活リズム）の定着を促す為に繰り返し指導や見守りを行った。感染症対策として、正しい手洗いの方法の指導や見守りを継続し、子どもが自分で出来るようになる姿が増えている。</li> <li>食事面では、咀嚼やマナー、苦手な食材も食べてみようと思う気持ちを支える言葉掛けを行い、食育としての意識づけも進んできている。</li> <li>年齢に応じた“分かりやすい指導”の工夫（視覚教材・絵本・クイズ・実物提示）に努めた。年少児には特に、絵本やイラストを使った丁寧な説明が効果的で、「なぜ必要なのか」を理解しながら行動できるようになっている。</li> <li>心の健康面では、「ふわふわ言葉・ちくちく言葉」など、情緒面の指導も分かりやすく伝えられた。</li> <li>今後の課題：行動へのつながり・継続的な意識づけ・安全面の強化が挙げられた。</li> <li>子どもが自分で気付いて行動できるよう、「この後どうするかな」などの自立を促す声掛けが必要と感じる。</li> <li>避難訓練の回数を増やすなど、安全面の意識づけも進められており、健康と安全を総合的に捉えた指導が広がっている。今後は、睡眠不足やデジタル機器の長時間使用など、現代的な健康課題への指導も必要と考える。</li> </ul>
3	<p><b>研修</b> 園内外での保育環境向上の為に研修に参加。研修で得た学びの共有</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの職員が 災害対応・防犯・AED・救命講習など、安全に関する研修に参加している。</li> <li>訓練後の振り返りを重ねることで、職員全体の危機対応力が向上している。</li> <li>誘導灯の確認や避難経路の理解、不審者対応の実技など、学んだ内容を園内の環境設定や訓練に反映できている。</li> <li>避難訓練を月1回行い、反省点を口頭や書面で共有するなど、安全意識の継続的な向上が図られた。</li> <li>保育・子どもの育ちに関する研修への積極的な参加と学びの実践、アタッチメント、自己肯定感、子どもの主体性、食育、アレルギー対応など、保育の質向上につながる研修に多くの職員が参加している。</li> <li>オンデマンド研修の活用により、時間の制約があっても受講しや</li> </ul>

		<p>すくなり、昨年度より多く参加できたという声が複数あり、学んだ内容を日々の保育に取り入れ、声掛けや環境づくりに活かしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修後に内容を整理し、自分の保育に落とし込み、学びを実践につなげる意識が高まっている。</li> <li>・学びの共有方法の課題と改善への意識</li> </ul> <p>「研修には参加できたが、職員間での共有が更に必要」という課題が挙がっている。研修資料をデータ化するなど、共有方法を改善しようとする提案も出ており、園全体で学びを広げる意識が高まっている。今後は、更に効率的な共有の仕組みづくりが求められていると考える。</p>
--	--	--

評価（A：十分に成果があった B：成果があった C：少し成果があった D：成果がなかった）

#### 4・総合的な評価結果

今年度「教育課程・指導」「保健管理」「研修」の3つの評価目標を重点的に行った結果、「教育課程・指導」については、職員が子どもたちの主体性を尊重し、探究が継続する環境設定・連携を取りつつ取り組んだ結果、内容の充実、成果が見られた。「保健管理」については、基本的な健康習慣・分かりやすい指導・心の健康に重点を置き、子ども達にも分かりやすく伝える事が出来、成果があったと思われる。また、「研修」においては、オンデマンド研修が増え、参加しやすくなった事もあり、研修参加率も上がり、一定の成果が見られた。今後も子どもたちの学びに繋がるよう務め、課題が見られた部分については、改善し引き続き内容の向上に努めたい。

#### 5・今後取り組む課題（2025年度に引き続き2026年度も継続）

	課 題	具体的な取り組み方法
1	教育課程・指導	<p>幼児が意欲的かつ主体的に遊び（活動）を進めるための環境の構成を行い、継続的な探究活動を行う。</p> <p>自分の思いを表現し、伝わる喜びを感じられるような保育を行う。</p>
2	保健管理	<p>健康に関する幼児の意識を高める指導の工夫を行う。</p> <p>子ども達にとって分かりやすい指導を年齢に合わせて行う。</p>
3	研修	<p>園内外での保育環境向上の為の研修に参加</p> <p>研修で得た学びの共有方法を再考する。</p>

#### 6・学校関係者評価委員会の評価と今後について

幼児の意欲的・主体的な探究活動を進めた結果、園での活動を通して子ども達がさまざまなことに興味を持ち、自分で考える力が育っていることが確認できた。家庭でも「こんなことも知っているの？」と驚かれるほど、知識や探究心が広がっている様子が見られるという意見も寄せられ、今年度の課題3項目の中でも特に高い評価を受けた。

また、保健管理や研修についても「十分に成果があった」「成果があった」との評価が得られ、日々のあたたかい関わりや質の高い教育が、確かな子どもの成長につながっていることを実感しているという声もあった。

さらに、今回の自己評価を通して「まだまだ伸びしろがある」と期待を込めた意見もいただき、今後の取り組みに向けて励みとなった。

これらの評価を踏まえ、今後も教育の質の向上に努め、子ども達が安心して登園し、集団生活を通して学びにつながる活動を経験しながら、心と体が健やかに育つ豊かな園生活を送れるよう取り組んでいきたい。

# 2025(令和7)年度 とうきょう すくわくプログラム活動報告書(年少組)

学校法人帝京大学 帝京大学幼稚園

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

砂 ～素材遊び～

<テーマの設定理由>

入園時より砂遊びを好む園児が多く見られた。当初は個々の遊びであったが、次第に友だちとの関わりも増え、共同遊びが見られるようになっていった。そこで、友だちとの仲をより深めていく中で、砂の触感や性質を遊びの中で感じ、3歳児ならではの発見や疑問を基に、新たな遊びへと展開していきたいと考えた為。

## 2. 活動スケジュール

<10月23日>3種類の砂と土(細目砂・中目砂・荒木田土)を紹介し、少人数グループで順番にそれぞれの砂と土に触れながら遊んだ。細目砂は「さらさら」「ふわふわ」、荒木田土は「少しかたい」等の触感の違いを感じることが出来た。型抜きをしてみると、荒木田土は形が遣りやすく、砂は崩れてしまうことに気付いた子の発言から、どうしたら形が崩れないかを考え、また新たに水を混ぜたらどうなるかということを決めた。

<10月31日>水を混ぜるとどうなるのか、それぞれの砂や土に混ぜてみた。細目砂と中目砂は固まりやすくなり、型抜きやお団子が作りやすくなり、喜ぶ姿があった。また、荒木田土は水の量によって触感が大きく変化することに気づき、水の量が少ない時には少しずつ固まりやすくなり、水を多く足した後の泥の状態では、形が崩れやすくなることに気づき、「(くずれちゃうのは) だるだるだからだね。」などの声が聞かれた。

<12月16日>前回水を混ぜたことによる変化に気付いた子ども達に、自分の好きな砂・土を選び、グループ毎に何か形のあるものを作って遊ぼうと促すと、水の加減による変化をつけたジュースやご飯等を作る子が多く見られた。

## 2. 活動スケジュール

<1月27日～29日>新たに室内遊び用の砂を追加して紹介し、グループ毎に触れてみて、細目砂・中目砂・荒木田土との違いを感じた。触感は少しザラザラした感じだが、水がなくても固まりやすいことに気付いた。また、次の日まで形が遺っている物もあり、持続性があることに気付いた。水がなくても固まりやすかったので、水を足したらどうなるのかという疑問と、「山を作りたいなあ」等大きなものを作りたいという声があり、スペースが足りないという状態が発生した。

<2月3日>大きなものを作りたいという意欲が増してきた為、園庭の砂場(中目砂)で友だちと協力して大きな山を作った。その際、ただ砂を重ねていくだけではサラサラと崩れやすいことに気づき、水を足しながら固めていた。山を大きくする子・固める子・水の量を調節する子と自然に役割分担が出来ていった。山を完成させると「トンネルも掘りたい!」という声があがり、友だちと協力しながら掘り進めた。出来た2つの山をつなげたいが、どうしたらつながるか、次回挑戦してみようとなった。

<2月7日>これまでの活動内容をドキュメンテーションにして、作品展で砂や土と共に掲示し、子ども達だけでなく保護者とも取組内容を共有することができた。

<2月27日>室内用の砂に水を混ぜたらどうなるのかという声があがったので、実際に水を混ぜてみて変化の違いを感じた。また、それぞれの砂の感触の違いや、水と混ぜた状態の違いを、顕微鏡を使用してホワイトボードに写し出し視覚を通して違いを感じられる機会を設けた。

<3月>大きな山を繋げるためにはどうしたらいいか、様々な道具を用意しておき、子ども達が選択し友だちと協力して答えを見つけられるよう促していく。

## 3. 探究活動の実践

### <活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

・初回は、細目砂・中目砂・荒木田土の3種それぞれのケースに分けて、スコップや様々な型抜きセット、ローラーやバケツ等を用意した。「さらさら」「ふわふわ」「がちがち」等の言葉が聞かれ、触感の違いを楽しむ姿が見られた。

・2回目以降、友だちと一緒に水を使うと「砂が沈んで2段になったね!」「ジュースみたい!」という発言も聞かれるようになった。友だちが作ったもの(泥団子やローラーで作った道路等)を見たり、保育者が子ども達が作ったものを積極的に取り上げ、「〇〇くんのお団子はまんまるだね!」等の声かけを聞くと真似をすることが増えた。

また、砂と水を混ぜ合わせた遊びでは、よりダイナミックに大きな物を作る姿があり、遊びの中での役割分担が自然と行われていた。子ども達が作りたいと思う物を作る為に、必要な道具を多めに用意して環境構成を行った。

・顕微鏡でそれぞれの砂と土を拡大してホワイトボードに映し出した。「大きさが違うね!」「黄色や黒や色々な色があるね!」と違いにも気付き、「クリスタルみたい!」という子もいた。また、室内用の砂は粒が揃っており、「丸い粒が沢山ある!」という声があがった。土は「ぼこぼこだね!」と固まりがあることに気付き、「水と混ぜたら変わるかな?」という疑問があがったので、全ての砂と土に水を混ぜて拡大したものを映し出したところ、特に変化がわかりやすかった土では「ぼこぼこがなくなったよ!」「色もおうど色が変わった!」とそれぞれが気付いた事を積極的に発言する姿が見られた。



#### 4. 振り返り

##### <振り返りによって得た先生の気づき>

- ・回数を重ねる毎に、友だちと「今日はカレーを作ろう!」「私はコーヒーを作るね!」と会話をしながら遊びを展開していくことが増えていった。また、子ども達が作りたと思う物に適した砂や土を、自ら選んで遊ぶようになっていった。
- ・子ども達の「水を混ぜたらどうなるのかな?」「固まりやすくするにはどうしたらいいのかな?」等の声を保育者が取り上げて共有し、次の探究活動に繋げていったことで、周りの子と一緒に疑問を感じ、積極的に取り組もうとする姿が見られた。
- ・少人数グループで、ケースを囲んだことで距離が近くなり、対話も盛んになって、友だちの遊びを真似したりすることも増えていった。
- ・砂による触感の違いや水を混ぜた時の変化を、「ふわふわ」「ほわほわ」「ぴかぴか」「冷たい」等、子ども達一人ひとりが感じたままを自身の言葉で表現しようとする姿があった。また、砂にはあまり関心がなかった子が、土に水を混ぜて泥の状態にすると積極的に活動に参加する姿が見られるようになり、扱う物の違いによる変化も感じる事ができた。
- ・顕微鏡で砂や土を拡大して見てみるという初めての体験は、子ども達にとってとても新鮮であった。砂や土の触感の違いが、顕微鏡での見え方(粒子の大きさ)と結びついたようで、新たなことを知る喜びを感じられたようであった。顕微鏡という新たな用具の使い方を知ったことで、今後他の問いが生じた際の探究方法の一つとして活かしていきたい。

# 2025(令和7)年度 とうきょう すくわくプログラム活動報告書(年中組)

学校法人帝京大学 帝京大学幼稚園

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

生き物・植物

<テーマの設定理由>

生き物に興味のある子が多く、自ら図鑑で調べたり、保育室で育てたいという発言があった為、生き物を育てる上での準備や日々の対応方法などを実体験から学び、他者を思いやる気持ちや命の大切さを子どもたちと考える機会になると考え、テーマにした。

## 2. 活動スケジュール

<生き物>

年少の時から飼育していたカブト虫の幼虫が蛹になり、継続して育てる。

- 4月 ・ 園庭でアリやダンゴムシを見つけ、飼育ケースに入れて観察をする。
- 5月 ・ みかんの木の葉に幼虫を発見し、図鑑で調べる。  
→アゲハ蝶の幼虫だとわかり、飼育をする。  
・ ダンゴムシやアリの絵本を読み、図鑑で調べ飼育を始める。
- 6月 ・ ダンゴムシの住んでいるところを調べ、幼稚園内のダンゴムシマップを作る。  
・ アゲハ蝶の幼虫が蝶になるのを観察する。  
→蛹から孵化する瞬間を録画し繰り返し観察する。  
・ クワガタの蛹を保護者から頂き、繰り返し観察を行う。
- 7月 ・ 飼育、観察中のダンゴムシ、蝶、クワガタ、カブト虫を製作活動で表現し、保育室に飾った。
- 9月 ・ 図鑑に示されていたカブト虫の触角や足の毛を顕微鏡で観察をする。  
・ 魚を育ててみたいとの発言があり、メダカの飼育を始めた。  
・ 実際の魚（さんま）に触ったり匂いを嗅いだりしてから製作をした。
- 10月 ・ 飼育を始めて間もなくメダカが死んでしまったことで、原因についてグループで話し合ったり調べたりする機会を設けた。  
・ 園庭でダンゴムシを見かけることが減ったことに気付いた園児の発言を受け、グループごとに原因を調べた。  
・ みかんの木の葉にアゲハ蝶の幼虫を再び発見し、飼育する。
- 11月 ・ クワガタがエサを食べなくなったが活着していることを確認し、グループごとにこの現象が何かを調べ、発表した。
- 12月 ・ アゲハ蝶の蛹が孵化しないのはなぜか考え、グループごとに発表した。

#### 〈植物〉

- 4月 ・植物に関心が向くよう関連する絵本を読んだり図鑑を用意した。
- 5月 ・野菜を育ててみたいという発言があった為子どもたちの意見により育てる野菜を決め、苗を用意した。
- 6月 ・野菜の生長を観察し、トマト、ナス、キュウリの3グループ分かれて記録をした絵や気付きをグループごとに発表した。
  - ・給食のメニューを使用して3色栄養素の色をクイズ形式で確認した。
- 7月 ・育てた野菜を収穫し、切って断面の観察をし、試食した。
- 9月 ・顕微鏡で野菜の種の断面図を観察したことから、種に興味を持ったため、種から野菜を育て始めた。
  - ・「だいどころのタネ」の絵本の読み聞かせ後、「育ててみたい」と家庭から持ってきたリンゴやトマト、かぼちゃの種を植えた。
- 10月 ・グループごとに野菜の観察記録を行いながら、生長過程に必要なことを調べながら間引き等を行った。
- 11月 ・発芽しなかった野菜の種の原因を考える。
  - ・育った野菜を収穫し、子どもたちが洗ったり切ったりするのを経験し、試食を行った。
  - ・食べられなかった茎や葉の活かせる方法を保育者が問いかけ、子どもたちと一緒に考えた。虫のエサにすることやコンポストを試みた。
- 12月 ・コンポストとして土に入れた野菜がなくなっていることを気付き、なぜかグループごとに調べる。
- 1月 ・観察記録で描いた野菜の絵や育てている様子の写真を基に、野菜栽培の振り返りを行い、野菜の大きさや形などを製作で再現し作品展に展示した。

### 3. 探究活動の実践

#### 〈活動の内容〉

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

- ・絵本、図鑑、プランター、土、苗、種、飼育ケース、昆虫のエサ、網、顕微鏡、プロジェクターを用意した。
- ・生き物に興味を持ち、飼育するために必要なものを調べたり、毎日観察できるように保育室に飼育コーナーを設置した。
- ・植物や生き物を責任を持って育てられるようグループごとの当番制とした。
- ・生き物や植物に変化が見られると、子ども同士や保育者に伝え合い、発見を共有する姿が見られた。
- ・生き物が死んでしまったり、栽培していた野菜が動物に食べられてしまったりした際に悲しむ姿が見られた。同じことを繰り返さないようにするための方法についての意見を出し合い実際に試みた。





#### 4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

多種類の飼育や栽培を通して、新たな知識を吸収すると共に次の疑問や課題が生まれ、図鑑で調べたり子どもたち同士で意見を出し合う姿が見られ成長を感じた。またうまくいかなかった事例についての理由を子どもたちと一緒に考えていくことで、子どもたちの興味・関心が更に深まっていくことを感じた。生き物や植物をそだてることに対して、一人ひとりが責任を持って取り組む様子が見られた。顕微鏡を使用した活動では普段目に見ているものが違う形や大きく見えることに興味を持ち、一つのものを観察しても違う見え方がすることで意見を出し合い、意欲的に観察する様子が見られた。

# 2025(令和7)年度 とうきょう すくわくプログラム活動報告書(年長組)

学校法人帝京大学 帝京大学幼稚園

## 1. 活動のテーマ

### <テーマ>

音～表現あそび～

### <テーマの設定理由>

日常生活の中で、耳にする鳥や虫の声に関心を持った子どもたちの間で、生き物の鳴き声の真似をする姿が見られた為、鳥や虫の声に加えて雨や風などの自然現象、身の回りの生活音へと興味の幅を広げたいと考え、テーマとした。更には、自分達で音を作り出し表現する活動へと繋げていきたい。

## 2. 活動スケジュール

- 6月：効果音 CD を使用して、音に関するクイズを行った。様々な鳥や虫の種類の鳴き声を聞き、音の聞こえ方や響きの違いを感じ、どのように聞こえたかを発表した。
- 7月：自然現象、動物、虫、乗り物の音を聞き模倣したり、イメージした動きを身体で表現する活動を行った。
- 9月：楽器に興味を持てるよう、手作り楽器の作り方の例を掲示し自由に作成出来るよう廃材や素材を保育室に用意した。また、材料を選択して手作り楽器を作成した。
- 10月：様々な既存楽器を紹介後、保育室に常設し、それぞれが自由に体験できるような環境設定をしたことにより、楽器に親しみ、音色の違いを感じた。
- 11月：劇ごっこの役のグループごとに場面や役柄のイメージに合った音を考え、廃材を利用して手作り楽器を作った。
- 12月：劇ごっこでは、既存楽器や手作り楽器を劇の効果音として取り入れ、表現あそびを行った。また、活動内容を動画にまとめ、保護者向けに zoom 配信を行った。
- 1月：手作り楽器を他学年に紹介する為に、お店やさんごっこの商品に加えた。
- 2月：6月からの音に関する活動のドキュメンテーションをグループごとに作成し、作品展で掲示した。

### 3. 探究活動の実践

#### <活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

・日常の中で耳にする自然現象や動物・虫の声に着目するきっかけ作りとして、効果音のCDを使用し、クイズや模倣あそびに繋げた。身の回りの音に気づき、発見した音や感じたことを保育者や友だちに共有する場を設けた。

・既存の楽器（17種類）を保育室に設置し、楽器の振り方・叩き方の強弱などによって音色が変化することを体験し、力加減を工夫して表現する楽しさを感じる姿があった。

・劇ごっこでは場面や役のイメージに合った効果音をグループごとに意見を出し合って決め、廃材を利用した手作り楽器や、保育室に常設していた楽器の中から選択し、表現活動に取り入れた。



#### 4. 振り返り

##### <振り返りによって得た先生の気づき>

園生活を送る中で、これまでには気付かなかった身の回りの音に着目するようになり、発見した音について周囲に伝えたい気持ちが芽生えていった。効果音 CD によるクイズを行ったことで、音を集中して聞こうとする姿勢が見られ、日常生活の中でも雨の降る量、風の強弱により音の聞こえ方が異なることに気づき、子どもたちの中から活発な発言が聞かれた。また、それぞれがどのように聞こえたのかを発表する時間を設けたことで、言葉での表現が豊かになり自身の気づきを友だちや保育者と共有する喜びを感じていた。歌の歌詞や物語の場面にあった音をイメージし、音の強弱や身振りで表現する活動へと広がった。